

ヨーロッパ的性格 ニッポンの性格

坂口安吾

青空文庫

ヨーロッパとニッポンが初めて接触いたしましたのは、今から四百年ばかり前のことでありますが、その当時に、ニッポンの性格とヨーロッパの性格とが引き起こした摩擦とか、交渉とかいうものを私の見た眼から、皆さんにお話してみたいと思います。

具合のいいことに、その当時ニッポンへやって来ました、皆さん御存知のいわゆるキリシタン・バテレンという、あれはカトリックのほうの宣教師なのでありますが、神父と申しますような人たちが、それぞれ故国へ手紙をやったり、報告を出したりして、まして、これらが今日残っております、当時の事情を知るために非常に大切、貴重な文献となっております。

ニッポンにも、この当時の事件とか事情とかを書いたいろいろな手記、記録というものがありますけれども、残念ながらニッポン製の資料というものは役に立たないのであります。殆んど駄目であります。

それと申しますが、ヨーロッパなどの外国の人たちの観察の方法と、ニッポン人の観察の仕方とは、本来的に非常に差異があります。ニッポン人はどうも物事を大いに偏って見る傾向があります。たとえば烈火のごとく怒ったとか、ハツタとにらんだとか、そんな風に云ってしまつて、それだけで済ましてしまふという形が多いのであります。物事をそれらの物事そのものの個性によつて見る、そのもの自体にだけしかあり得ないというような

根本的にリアルな姿を、取得しておらないのであります。そういうことが、まことに不得意なのであります。

でありますから、実例をとって申しますと、織田信長が本能寺で殺されました時のことを、「信長記」という本がありまして、それに書いてあるのを読んでみますと――

「明智光秀の軍隊はやにわに亀岡から下りて参りまして、本能寺を取り囲んで、ドツとばかり勝かちどき鬨をあげて、弓、鉄砲を打ちこんだ。本能寺のほうでも眼をさまして、中から豪傑連中が飛び出して、明智勢のなかに斬り込んだ。初めのうちは、明智勢がたじたじとなりましたが、そのうちにそれらの連中が討死しますと、だんだん寄手の勢いが強くなった。織田信長までが寺の廊下へ現

われまして、片はだ脱いで槍を持ち出して、近づくやつを突き落した。そのうちに矢が片腕に当りましたので、部屋の中央にもどつて来て、火をかけて自殺した」

——こんな風に書いてあるのであります。

ところが、この当時に、この本能寺という寺のあった所から、約一丁ばかり離れた場所に、京都に於けるたった一つのキリシタンの教会があつたのでありますが、この教会におりましたヨーロッパ生れの神父たちは、真夜中に戦争らしい物音に眼をさましたのであります。それからまア、いろいろと避難の用意などをあれこれと致しまして、夜の明けるのを待ちまして、もつともたゞ黙つて待つていたのではありません、尽せるだけの手段を尽してあ

らゆる方面から情報をあつめたのであります。可能な限りの探査を行ったのであります。全然、落ちついていたわけでありませぬ。これらの人々によつて収集されたニュースは、適当にまとめられまして、直ちにそれぞれの本国に報告されたのであります。

その報告によりますと、こういうことになるのであります。――

「明智の勢は、本能寺を取り囲んで、それから本能寺のなかに乗り込んで行ったのではなく、本能寺のほうでは謀反などという嫌疑すらも持っておりませんでしたので、誰も手向つてゆく者がなない。どこに一人も抵抗する者もなく、どんどんと這入つて行つて、信長のいるらしい部屋のところまで来てしまった。信長は顔を洗

つて手拭いで拭いていました時に、そこに、先頭にはいつて来た奴が弓を射った。その矢が背中に刺さりましたので、ぐつと振り向くとその矢を抜きとつて、薙なぎなた刀をとるとしばらくの間戦いました。そうしていると今度は、鉄砲の弾丸が片腕に当りましたので、寝所のなかに這入つて切腹した——という説と、「寝所のあたりに火をつけた」という説と二つあるのでありますが、その直後のことは誰も見ていたわけではありませんから、まるつきり分らないのであります。

ところが、同じこの事件についての、キリシタン・バテレンの連中の報告というのが、実に精確きわまるものなのであります。その証拠があるのであります。彼等の報告は今日もいろいろな形

式で書物になって、私たちの手にはいりませんから、それをお読み下さるとお分りになるのでありますが、そういうものと、ニッポン人としては珍らしくリアルな手記を残している一人の人間の書いていることを比較されますと、私の申すことが御諒解になれると思うのであります。

ここで私の申します、リアルな記録を残した、例外的な一人のニッポン人というのは、明智方として、本能寺へ寄せた軍勢中の大将の一人で、ホンジョウ・カクエモンという男のことなのであります。彼の覚書によりますというと、信長の死の前後は次のようになっています。これは手記でありますから、この部分もごく簡単であります。――

「本能寺のなかへ乗り込んだ時には、相手のなかで誰も手向つて来る者が無い。或いは自分を仲間だと思つていたのか、自分が這入つていつても手向いする者がなかつたのか。それだからと云つて、寝ている者もなかつたし、気を配つてみたけれども鼠一匹すらも姿を見せなかつた。せめて二、三人でもと思つたが、おどりに出して抵抗して来る者もなかつた。そもそも抵抗というものを何ひとつ感じることなく、信長の寝所へゆきついたのであつた」――

こんな風なことが誌されております。

この一例でも分つて頂けると思ふのでありますが、すこしも他に煩わされることなく、自分自身の体験そのものを、明確に書

き上げた日本人の手記というものは、滅多にないのであります。これなどは実に特別な、特殊の例なのであります。殆んど、いや全ての者は、物事の本態を見るところを忘れているのであります。いつでも他人の思惑が考えられていまして、独立の個人の自由な考えとか、観察方法とかは許されていないし、許されなければブチ破ってやろうという人物はいなかつたのであります。ニッポン人にとっては、毎時でも、もつと一般的な、嘘があつてもかまわぬから一般的でさえあればいいというような調子がお得意なのであります。相も変わらず、ハツタとにらんだとか、烈火のごとく憤つたとかいう云い方、そういう方式、どうにでもなるというような一般的な観察で片づけてしまおうとする考え方、従

つてそのような手記、記録がぞくぞくと現れているのであります。むしろ、そればかりであります。

このような観察の仕方にくらべますと、ヨーロッパ人たちの物の見方というものは、個々の事物にしかない、それぞれのその物事自体にしかあり得ないところの個性というものを、ありのままに眺めて、それをリアルに書いておりますので、それだけに非常に資料価値が高いのであります。そのリアリティというものは尊敬すべきであります。

今日、私たちニッポン人というものが、外国のいろいろな物事の真似をする時には、この意味での外国の性格、そうしてニッポンの性格というものをよく知り、殊に申したいのは、ニッポン人

にはこのような性格上の欠点があるということ、よく知っておく必要があるということであります。

併ししか、それは今日の話でありまして、この話の当時にありましては、今私が申したような、個性に即した物事の見かたとか、観察の仕方というようなものは、驚くべきことには、婦女子の感覚だと云われていたのであります。そして、貶けなされていたのであります。それはどういふことかと申しますと、その当時の考え方では、男子たる者は、もっと大ざっぱに物事を考えなければいけないので、こういった細かい物事にはわざと眼をふさいで、気がついていても気がつかない振りをするほうが立派なのだ、という人生観がずーっと流行していたからであります。それが絶対的な

権威をもったニッポンの人生観であつたわけであります。こういうバカバカしい事が、ニッポン人一般の、物事の観察法、世界観といひますか、人間観察というものを大變に遲鈍にさせまして、實態にふれることのない、抽象的な考え方をはびこらせることになつたのであります。抽象的にならざるを得なかつたのであります。弱いのであります。

前にも申しました通りに、ニッポンと西洋とが接触しましたのは四百年ほど前のことでありまして、キリスト紀元の一五四三年、十六世紀、ニッポンで申しますと天文十二年であります。ちょうど、足利末期の戦国時代の始まりかけた時であります。但しこの時は、ヨーロッパ人は初めからニッポン本土へ来ようと思つてい

たのではありません。シナの船が、暴風に吹き流されて、種子ヶ島へ漂着したのであります。そのシナ船には、ポルトガル人が三人乗っております。

この三人のポルトガル人が鉄砲を持っておりました。この時にニツポンに初めて鉄砲が伝つたのであります。これが例の、われわれが種子ヶ島と云つておる、あれであります。これはまた、ヨーロッパとニツポンが接触いたしました初まりなのであります。

御存知のマルコポーロであります、彼の手記に書いてあるニツポンは、ジパングということでありまして、黄金で出来あがつている国だということになっております。そのように彼は報告しておるのであります。この報告によつてニツポンへやつて来る人

間が、大變に多くなつたのであります。そういう志を持つヨーロッパ人が急激に増加したのであります。

けれども、皆さん御存知のいわゆるキリスト教というものが、このニッポンへ渡来いたしましたして、そして、本当の意味でニッポンと外国とが政治的に接触いたしましたのは、それから六年ほど経ちました一五四九年の、七月十五日のことであります——これはキリスト教の歴史という点で考えますと非常に大切な日なのであります——、この日に、フランシスコ・ザヴィエルという人物が、ニッポンの土地に初めて到着したのであります。

さて、この事実についてであります。われわれが特に記憶しておかなければならぬことがあるのであります。それは、この時

に初めて日本の土をふんだ、このフランシスコ・ザヴィエルという宣教師は、当時、ヨーロッパにおきましても、まれに見る高僧なのでありまして、ジェスイットという宗派は、御存知のとおり今日でも残存致しているのでありますが、この宗派の開祖であるロイラーなる人物の最も親密な協力者であり、また最も信頼された同志であり、自他ともに許した最高の学識を有した高僧であったのであります。とは申しますものの、このジェスイット派と申しますのは、十六世紀の初頭にいたってカトリックが腐敗いたしましたので、それに対抗しそれを改革しようとして、例のマルティン・ルーターが新教（プロテスタント）を樹立した、その結果としてカトリックの名声が地に墜ちました時に、こんなことでは不可

ないというので、真のカトリック精神、根本的なものへ還つた意味でのカトリックの精神を實質的に回復させなければならぬといふので、イエス・キリストの弟子という標語を押し立てて組織されたところの、非常に強力な同志的な結合をもっている宗教団体でありまして、貧乏、童貞、服従という三つの徳目をモットーといたしました、人間個人は一切の私利とか私慾とかいうものを捨離して、神に仕えるという宗教であります。この宗派のこのモットーは大変に厳しいのでありまして、戒律というようなものが厳しいものであるなかでも、このジエスイット派は、特に厳格な戒律を守るといふ誓言によつて成立した宗派なのであります。この宗派が確固としたものとなりましたのは、フランシスコ・ザヴ

イエルがニッポンに到着しました時の九年前、すなわち一五四〇年に到りまして、初めてのことなのであります。

もともと宗教と申しますものは、長年月にわたってつづいておりますと、どうしても墮落いたしますものですけれども、その例はまことに多いのであります。このように宗派の結成の初期といたしますものは、何しろ非常に熱狂的なのであります。従ってニッポンへ初めて参りましたフランシスコ・ザヴィエルは前に申したとおりであります。その後にはたつて続々としてやって来ましたが神父たちも、いずれもヨーロッパにおきましては、最も高徳な僧侶である、ということを記憶しておかなければなりません。

これらのことを頭の中へ入れておきますと、ニッポンがその当

時に於てヨーロッパの影響をばげしく受けまして、殊に精神的には驚天動地というような感動を受けた面がありましたのも、たゞ今申すとおりに、ヨーロッパでも扱よりぬきといった神父たちがそろつて、ニッポンへやつて来ていたという、特殊な事情があつたからなのでありまして、彼の地の宗教事情はともかくとしても、ニッポンにとつては、これは望外の仕合せであつたのかも知れないのであります。

ところで、このフランシスコ・ザヴィエルという人物であります、この教父がどうしてニッポンへやつて来るようになったかと申しますと、実はザヴィエルはインドで布教するために東洋へやつて来ておつたのであります。ですが、インドは御承知のお

り熱帯地方でありまして、インドの人間という者は、非常な怠けものでありまして、熱い熱いでどうも仕方がないのですから同情しますが、新しい知識などを求めようという意欲はまず持つてないと云つてよいのであります。もう一つ、インドにはごく古くから伝つてゐる宗教が根強くはびこつていまして、その力はひろいので、新しい宗教を受けつけることを為しないのであります。

さすがのフランシスコ・ザヴィエルも、この有様で、悲観しておりますと、たまたま一人のニッポン人が彼のところへやつて来たのであります。これは弥次郎という人間であります。

この弥次郎が、どうしてインドへやつて来たのかと申しますと、彼は鹿児島の人間であります。或る時、人を殺しまして、役人に

追われて、お寺へ逃げこみました。何とかして助かりたい。ところが、彼はポルトガルの一商人と友だちでありましたので、そのポルトガル商人に頼みこみまして、鹿児島港へポルトガル船が碇泊しました時に、うまく乗り込み、海外へむかつて脱走しようという手はずをととのえたのであります。その商人から紹介状をもらつて、港へ出かけたのですが、ポルトガルの船が二艘来ておりました。この二艘の船の船長は、フランシスコ・ザヴィエルを非常に尊敬していたのであります。

船長は弥次郎の話を聴きまして、大いに同情を催したのであります。船長は、弥次郎をザヴィエルに紹介してやろうというので、船へ乗せて、マラッカへ連れて参りました。

弥次郎はザヴィエルに会いまして、その人格に傾倒したのであります。が、ザヴィエルのほうでも、弥次郎を見ましたところが、今まで眼の前に見ていた熱帯の土人には見ることの出来ない知識、記憶力、礼儀正しき、を認めただけでなく、その上にいつまでも何かを知ろうとする真面目な努力のひらめきがあることが分りましたので、ニツポン人という人間がこのような人種であるのなら、このニツポンこそは、自分の伝道すべき地域であると考えたのであります。ザヴィエルは、この弥次郎という人間が、実際にどうも誠心誠意キリストの教えを守るので、とても吃驚びっくしたのであります。彼は弥次郎を、インドのゴアという所にあるキリスト教の学校へやって勉強をさせたのでありますが、弥次郎はも

ともとポルトガル人の友だちを持つていましたし、ゴアへ参りましても、普通のニッポン人にくらべますと驚くべきほど早く、たちまちにしてポルトガル語が上達いたしました。また、キリスト教の趣意を理解することにおきましても、長足の進歩をしたのでありまして、そのゴアの学校でも並ぶ者のないほどの、最高の学者になつたのであります。

こんな具合ですから、ザヴィエルは、弥次郎に対して絶大な信頼をよせていたのであります。どうも併しこのことの為に、今日になりましたもニッポンの歴史家たちは——主としてキリスト教の歴史を書いておる歴史家のことを云うのであります。そして大体に於てはキリスト教徒のほうが多かつたのであります。

ども——ザヴィエルを、この上もなく信頼しておりましたので、ザヴィエルの説をもそのままに呑み込むことが多く、弥次郎の人格をもまた非常に高く買っておるようでありますけれども、われわれ文学にたずさわっております者の眼から見ますと、どうも、そういう風には思えないのであります。

この弥次郎という青年は、いろいろな点から調べてみましても、どうも、その判^はつきりした身分とか身許とかが、分らぬのであります。明確なところが少いのであります。ポルトガルの商人と親しい人間であったことは確からしいのでありますけれども、ザヴィエルがニツポンの事情について種々と聴きました時にも、宗教のことなどについては、まるで何も知らなかつたのであります。

従つてニッポンの仏教についてなども何も知らない、無知そのものでありましたので、ザヴィエルが非常にがっかりしたというところが、ザヴィエル自身の書簡のなかに書かれておるのであります。ところで、問題がひとたび貿易に関係して参りますと、この弥次郎が実に正確な知識を持っているのであります。このことから判断してみまして、彼が多分商人の出であつたろうということが分るのであります。年は三十五、六歳であつたということでありま

す。

思うにこの人物は、非常に世慣れた遊び人でありまして、いろいろと変つた境遇に順応することの出来る処世の術を、かなりよく心得ておつたのだらうと思つてあります。ですから、郷に入

つたら郷に従えというわけで、ザヴィエルに会いますと、彼はこの教父に順応するためには多めに努めたのでしよう。また、彼がザヴィエルに傾倒したというのは、本当のことであろうと思います。が、それは、人を殺すぐらいの人間というものは、非常に人に惚れっぽいのでありまして、その点からしても彼がザヴィエルに参つたろうということは肯けるのであります。弥次郎は、キリスト教の教えのなかで何に一番感動したかと申しますと、それはキリスト受難に対してなのであります。思うにこの男は一種のボヘミアンの性格を持っていたに違いないのであります。このような弥次郎がキリストの受難に心を傾けたということ、その事実だけは、一つの事件として肯けるのであります。弥次郎はキリス

ト教徒になつたのではないのであります。

初めのうち、ザヴィエルがそばにおりました間は、真面目な顔をしておりましたけれども、間もなく彼はグレ出したのであります。後になりますと、例の八幡船ばはんせんという、半分は海賊みたいな、半分は貿易をやるような船に乗りこみまして、シナへ這入りこんでいってニッポンという所でシナ人に殺されたという記録が残っております。

こんな人間でありますだけに、この弥次郎という男は非常に礼儀正しいのです。もともとニッポン人というものは、実際は礼儀正しいところがあるものなのでありますけれども、元来よい人間というものは、むしろ却ってザツクバランなものなので、そんな

に糞真面目に人と応対などはしないものであります。弥次郎は、おそらくはザヴィエルに対して、何事につけても非常にしかつめらしい態度で応待しておったんだろうと思います。ザヴィエルはそれを大変に信用しまして、おそらくニツポン人というものについて最初の観念におきまして誤っておりましたので、ニツポン人を見る眼に誤解が起つたんだろうと思われる節があります。

ここにまた面白い事があるのでありますが、私がなぜ弥次郎をそんな人間であるかと申しますかという、たとえばザヴィエルが――

「ニツポン人は、私が行つて布教したら、すぐにキリスト教徒になるだろうか？」――という風に弥次郎にたずねましたところ

が、弥次郎が答えまして——

「いや、ニッポン人というものは非常に理屈っぽい国民で、すぐにはキリスト教徒にはならぬ代りに、道理というものを飲みこめば、改宗します」

——という風に答えております。こういうところは、ニッポン人観というものが大いに正確でありまして、仏教の知識が何一つなかったと思われる弥次郎にも似合わない、人間観察の正しさを見せております。

また、ザヴィエルがポルトガルの船に乗ってニッポンに行こうと申しました時に、弥次郎はそれに答えて、——

「ポルトガルの船乗りというやつは非常に好色で、ニッポンの港

へやって来て、とても評判がよくないから、あんな船へ乗っていったら、キリスト教の名声を落します。ですから、シナの船に乗りなさい」

——と云つて、シナの船に乗せたということでもあります。こういうことも、ニツポンの歴史家は、弥次郎がこんなことを云つたことは一種の伝説だろうと軽く片づけていますけれども、私はそこに弥次郎の本音があるのだらうと思います。弥次郎は、非常に遊び人的な風格を持った人間でありますから、そういう船乗の生活というものがニツポン人に反撥されるということは、非常によく、実感をもつて、知っておつたのだと思われるのであります。

この弥次郎に伴われまして、フランシスコ・ザヴィエルはニツ

ポンに参つたのでありますが、ニッポン人は大歓迎をいたしましたのであります。初めのうちは押すな押すなの繁昌というわけでありませう。何しろ七人ほど黒ん坊を一緒に連れて参りましたので、その黒ん坊を大変珍らしがってニッポン人が押しかけました。

サツマの殿様の島津さんに謁見いたしました。布教の許可を受けることができました。この時にザヴィエルが、鹿児島の方ウ寺のニンジという高僧と友だちになりました。このフクソウ寺というのは、鹿児島の方ウ寺の菩提寺だそうで、当時百人ほどの僧がおつたと申しますから、非常に大きなお寺、サツマで最大のお寺であり、そのニンジという僧は、サツマきつての傑僧であつたのだと思います。

ザヴィエルは、このお寺を借りまして、キリスト教の説教を始めました。

フランシスコ・ザヴィエルは、フクソウ寺の傑僧ニンジと、毎日のように顔を合せていますし、いろいろなことでも友達になったのでありますが、ニンジとは種々の話題をつかまえて話をしておりまして、それが記録みたいなものに残っております。

ザヴィエルが或る日、フクソウ寺へやって行きますと、百人ばかりの坊主が坐禅をやっておるところでした。これは変った風景に見えたことでありましょう。

ザヴィエルは、

「あれは、一体、何を為ているのですか？」

と聞いたのであります。

ニンジは、

「あゝ、あれですか、あれは瞑想しているのです。目下、苦行を
しているのですよ」

と答えたのであります。

これがザヴィエルには、なかなか合点が行かない。

「瞑想と云ったって、あんなふうなことをして、そもそも、
何を考えているんですか？」

と聞かざるを得なかつたのであります。

この問いを耳にすると、ニンジはにつこりと笑ひまして、

「いや、あの連中のことですから、どうせ碌なことは考えている

わけがありません。おおかた、明日の御布施がどのくらい集まるだろうとか、出かけて行った先きの檀家で、どんな料理が出るだろうとか、そんなことをでも考えているんでしょう。大したことば考えていませんよ」

というような返事を与えたのであります。

この答えはまことに象徴的なものでありまして、禅宗の坊主としては、なるほど云いそうなことであります。尤もな話なのであります。ニンジというこの坊さんが、当時のいわゆる傑僧であり、また事実上でも高僧と云われているような人物でありますだけに、このような言葉には意味があるのであります。大体が、禅というものには人間の持っている人間性、そのすべてのものを、そのまま

に肯定する、というところから始まっているのであります。ニンジも、人間が行動するところのピンからキリまでを肯定する、肯定しようと努力するのであります。彼等にとつては、この人間性の肯定ということが、そもそも出発点なのであります。

禅はこのように考えておりますから、例えば人間の強さも弱さもそれらをとにかく全部的に肯定してしまふ。その上で、その肯定という基本的努力の上で、自分の自分一個の安心の道を講ずるのであります。安心の世界を見出そうと努めるのであります。

他人というものには構わずに、自分だけの悟りを求めるといふのが禅の建前なのであります。それだけに逆にまた他人に対しては寛大な態度をとるのであります。一口に云えば鷹揚になり得

るのであります。

ですからニンジは、しかつめらしい顔をして坐禅を組んでいる、修行中の僧侶たちが、そのままで行い澄ました境地にいるのだ、というふうには、云い得なかつたのでありまして、たとえ彼等が人間本来の弱さからして、どんなに俗なことを考えていたにしても、それはそれとして咎めるべき筋合いのものではないと考えているのであります。ごく寛やかな見方をしている訳であります。そこで、そういうことを云つたのであります。

すると、これを聞いたザヴィエルのほうは、非常にびつくり致しました。日本の坊主というものは、苦行の最中にも、宇宙とか神とか真理とかいうようなものことは一寸も考えずに、瞑想の

間にあつてお金のことや料理のことを考えているのである、というようなことを直ぐに本国へそのまま報告した、ということが記録に載せられております。

また或る時に、ザヴィエルがニンジに向いまして、

「貴方は一体、年齢が若い頃がよろしかつたか、年をとつてからのほうがよろしいか？」

ということを聞いたことがあります。

ニンジはそれに答えまして、

「いや、若い時のほうがよかつたですね。若い時には元気があ
り好きなことも出来たりするし……」

と云いました。

こういつた問答があつたのでありますが、ザヴィエルは続いてこんな質問をしているのであります。――

「それではですね。今、一人の船乗りが船に乗って、Aの港からBの港へ行こうとしているとする。そういう時に、彼が元気に任せて荒海へ乗り出して暴風にもまれて行くのがよいか、それとも何処かの港へまず近寄り、そこで段々に港から港へと伝わって行くほうがよいか、どちらがよいだろうか？」

これを聞くとニンジは笑い出してしまいました。そして答えた。「そりアそんなことは極つていますよ。云うまでもありませんよ。港を目指して行くのがいいです。港というものが判つきりしておつて、自分が歓迎されるということが分れば、誰だつてそこへ行

きます。けれども、私は、私の船がどこへ行くのか知っていないんです。自分の行く先が分らないのですから、貴方の云うようなことを聞かれても、私には返事が出来ませんよ」

こんな答だったのであります。

ニンジという人は、非常にザヴェイエルを尊敬いたしておったのです。それからまたカトリックにも大いに傾倒いたしましたのであります。そして自分もカトリックになろうと思つて、大變に苦悶いたしましたのであります。

ニンジの帰依しておりました禅宗というものを考えてみますと、この宗教は、人生をそのまままで肯定して、その上で自分一個の悟りをひらこうという目的で、坐禅などをいたしまして、観念だけ

の上で安心をはかろうといたすのであります。死生の大悟などと云いまして、われわれが見ますと、禪の高僧などといいますが、如何にも悟りきった人間であるようでありませんが、高僧であればあるほど、そういう自分自身の悟りが未熟であることを知っておるのだらうと思います。そういう悟りの場に於ても、仏教には実践がないのでありますから、具体的な手がかりというものはないのであります。自分が何をしておるか分らないのであります。

ところが、ザヴェイエルのはうは、貧窮ということを第一のモットーといたしまして自分自身の全生涯をそれで計っております。そして、他人の幸福のためにすべてを捧げて生きようというふうな、彼の生涯はそれにかかっているのであります。

そういった、実践の目標の判つきりしている宗教の前へ出ます
という、禪宗の如き宗教は、全然意味をなさないであります。
自分自身が高僧であればあるほど、悟りの内容の空虚さが分つて
来るのでありまして、その点でニンジは非常に苦しかったのであ
ります。

ザヴィエルが帰国しました後で、彼の弟子のアルメードとい
う布教師が来たのでありますが、そのアルメードに向つて、ニンジ
は、

「自分は禅僧としての地位と名望のようなものがあるので、公然
とキリスト教徒になることは出来ないが、どうか自分に洗礼をさ
ずけて貰えないだろうか。そして、自分は殿様の菩提寺の坊主を

やっているのだから、殿様の死んだ時には、自分としては、お寺へ葬らなければならぬ。それは仕方のないことなのだから、せいっだけはどうか勘弁して呉れないか」

というようなことを云って頼んでいる。

そうするとアルメードは、

「それは不可^{いか}ん。貴方は、名誉とか地位とか、そのようなものは、すべて捨ててしまいなさい。すべてを捨てなければ、洗礼を授けるわけにはゆかない」

と判つきり答えています。それでとうとう、ニンジは洗礼を授けて貰えなかったのであります。アルメードは帰国し、再来し、さらに三度目にサツマへ参りました時には、ニンジは死んでおつ

たのでありますが、死ぬ時に、洗礼を受けなくて死ぬのはまことに残念だ、という遺言のあつたことをアルメードが聞いていることが、伝わっております。

この禅僧とカトリック僧侶との交渉は、もう一つあるのであります、フランシスコ・ザヴィエルは、ニンジに会ってから後に豊後へ行きました。そうして、フカダジという禅僧と会っているのであります。この時に、フカダジは、ザヴィエルの顔を見まして、

「あなたは何処かで見たとのことのある顔ですが、如何がですか、私の顔に見覚えはありませんか？」

と聞いたのであります。

それを聞いて、ザヴィエルはびつくりしました。一度もこの二ツポン人とは会ったことがない、従つて顔を見たことがないのでありますから、驚くのも無理はありません。そこで次のように答えたのであります。

「いや、あなたの顔は見たことがありません」

この答を聞いて、フカダジは大笑いをしたのであります。そして自分の寺へちようど来ていた、ほかの禅僧のほうを向きまして、「この人は、おれの顔を見たことがないなどと云うが、大變な嘘つきだよ」

というようなことを云つたのであります。話しかけられた禅僧もフカダジの云うことが分つたような顔つきをしていましたが、

ザヴィエルには納得がいけないのであります。これは納得のいかないのが当然なのであります。ザヴィエルは、

「これはおかしなことを聞くものだ。私は曾つて嘘というものをついたことがない。今も嘘をついた訳ではないのだ。どうして、私を嘘つきだなどと云うのです」

となじつたのであります。

フカダジはそう云われて、こんな答をしております。

「あなたは、そんなに白っぽくくれていられるけれども、今からちようど千五百年前に比叡山で、私のために金を五百貫見つけて呉れた商人というのが、あなたじやありませんか。それを忘れて貰つちや困る。それともあなたは、ほんとに忘れたのですか？」

こんな言葉であります。

これは、そもそも禅問答なのであります。

ザヴィエルのほうは、そんなことは頭のなかに初めからはいっていない。禅問答の要領などというものは、御存知ないのであります。これは知らないのが当然であります。まるつきり問題になつていない。ですから、このフカダジという坊主を、大変な出鱈目をしゃべる奴だと思つたのであります。そこで、

「あなたは一体、幾歳になるのですか？」

とフカダジに聞きました。

フカダジは答えて曰く、

「私ですか、私は五十二才です」

すると、ザヴェイエルは、

「五十二才という人間が、千五百年前に、比叡山で金を貸すことが出来るということは、おかしいではありませんか。そんなことはあり得ない。あなたは、どうしてそんなことを云うのですか」

と問い詰めたのであります。

これには禅僧もすっかり参ってしまったのであります。

つまり、禅には禅の世界だけの約束というものがあるのでありまして、そういった約束の上に立って、論理を弄しているものなのであります。すべては、相互に前もって交されている約束があらはれて成り立つ世界なのであります。

例えば、「仏とは何ぞや？」と問いますと、

「無である」「それは、糞搔き棒である」とか云うのです。

お互いにそういった約束の上で分ったような顔をしておりませけれども、それは顔だけの話なんでありませ。分っているかどうか分らないのでありませ。

ですから、實際のところは、仏というものは仏である、糞搔き棒は糞搔き棒である、というような尋常、マツトウな論理の前に出ますというと、このような論理はまるで役に立たないのでありませ。そして、このような一番当り前の論理の前に出まして、それを根本的に覆えすことの出来る力がどんなものだか、どこにあるかと云いますと、それは実践というものと思想というものが合一しておるところにしかないのでありませ。

ところが、このような生き方は、禅僧にとってはやまことに困難なのであります。それで、禅僧というものは、約束の上に立つている観念でだけのごとを考えているばかりでありまして、実践がない。悟りというようなものを観念の世界に模索しておるのではありませんから、智力というものに頼つてはいても、実際の自分の力なるものがどのくらいあるのか、分つておる人間はいないのであります。ですから、カトリックの坊さんのように、実践ということにすべてを賭けている宗教家、その実際的な行動の前には、禅僧は非常に脅威を感じるのであります。自分の実力のなさ、みすばらしさを感じるわけでありませう。そうして、禅宗を信じる者が、僧侶でありながらカトリック教へ転向するということが、大

いに流行したのであります。それは、今日、われわれが想像いたしますよりも、遙かに多数なのであります。これは今日から見ますと驚くべきことではありますけれども、事実なのであります、それは記録に残っておるのであります。

このフカダジとの問答などがありましたから、ザヴィエルは鹿児島を去って山口へ行きました。

山口で布教をいたしましたから、さらにザヴィエルは京都へ行ったのでありますけれども、その当時の京都は、戦争のまっ最中であります、一体ニツポンという国の主権がどこにあるのだから、それが分らないという目茶苦茶な状態にありました。これにはザヴィエルもまごついたのであります。併し、宣教師一流

のしつっこい、熱心な探索によりまして、ようやくのことで、足利將軍の逃げまわっている姿を見つけ、つかまえて、ニッポンに布教を許してくれるようにと頼んだのであります。こいつは当時にあつては大変な仕事であつたでありましょう。とにかく、ザヴェイエルはそれをやつてのけたのであります。こんなところにもカトリック僧の実践力をうかがうことが出来るのであります。

ところで、このザヴェイエルの布教の許可の願いに対して、足利將軍のとつた態度というのがはなはだ妙なのであります。ザヴェイエルはその時に乞食みたいな恰好をしておりました。一見したところ、如何にも見すばらしい僧侶でありまして、どうもこれが高僧とは思えない。全然、威嚴というものがありません。こ

れには将軍ががっかりした。ですから将軍のほうは、

「お前は、おれに対してそういうことを頼んでいながら、そもそも贈り物というものを持って来ているのか？」

と問いただしました。ザヴィエルは、

「贈り物は山口においてあります。ここまでは、あまり長い旅行だったものですから、持って来ていない」

と答えたのであります。将軍はそれを聞くと、

「贈り物がなければだめだ」とはねつけたのであります。

ザヴィエルは、こう云われて、諦らめてしまいました。山口へ帰ったのであります。ザヴィエルはそこで考えました。——もう将軍に会っても、こんな混乱した時代じゃ意味がない、会ったつ

て無駄だ。贈り物も將軍なんかにはやらない、山口の殿様にやつてしまおう。――

ザヴィエルは贈り物を山口の殿様に呈上することに極めました
が、前に將軍にあつて懲りたことがありますから、今度は身なりに
気をつけました。

きらびやかに盛装をいたしまして、山口の殿様に会い、贈り物
をすると、殿様のほうではその威容に打たれまして、尊敬の念を
おこしました。そうして直ぐに、布教の許可をもらうことが出来
たのであります。盛装と贈り物がモノを云つたことになります。

それから、ちようどこの頃のことでありませんが、例の豊後と申
す土地へ、ポルトガルの商船が一艇やつてまいつたのであります。

もつとこまかく申しますと、豊後の府内というところの直ぐそばにある臼杵（ウスキ）と申す所へ参つたのであります。

このポルトガルの商船のなかで、東洋の布教師であるフランシスコ・ザヴィエルが山口に來ているという話だから、一つ呼ぼうではないかということになりました。使いの者の言葉を聞いて、ザヴィエルが臼杵までやって参りますと、船のほうでは、それ東洋布教師が來たのだ、というわけで、船中の全員がそろって盛装して出迎えに行つたのであります。

一方、ザヴィエルのほうはどうかと申しますと、いつものとおり乞食に似たような姿恰好をいたしまして、馬へもカゴへも乗らずに徒歩でやって参ります。それだけならまだいいのであります

が、ザヴィエルは、旅の途中で熱病にかかりまして、身体に熱はあるしだるいしという訳で、フラフラしながらやって来たのであります。

みんなが、

「どうか、馬に乗って下さい」

と云つてすすめても、云うことを聞きません。仕方がないから出迎えに来た盛装の連中も、みんな馬に乗っていましたのに、わざわざ降りてしまひまして、そうしてザヴィエルの後からぞろぞろと随つて参ります。そうして、いよいよポルトガルの船の碇泊をしております所まで参りますと、六十三発の大砲をぶつ放しました。

白杵の城内では驚きました。そら、ポルトガルの船が海賊と戦争を始めたというので、あわてて兵士をくり出しまして、あわてて救援に参ったのであります。駛かけつけて行つて聞いてみると、案に相違して、今、高僧が到着したから、礼砲を打つたのだという話であります。駛かけつけた連中は、非常に吃驚りいたしました、歸つてそれを城中へ報告します。

白杵の殿様はそれを聞いて、そんなにみんなが尊敬している高僧ならば、ぜひ会いたいものだといふので、また使いが飛んで、ザヴィエルは白杵の殿様に会うことになりました。

この殿様というのが、大友義よししげ鎮、後に宗そうりん麟と名を変えた人であります。この対面の時というのが、実に大変なものでありま

して、ポルトガル商船の一行は、豪華版をひろげたのであります。まず行列の最前列には、楽隊がずらりと並び、その後には金モールや銀モールの美しい、凜々しい服を身につけたポルトガル人が騎馬で、並んだのであります。次ぎにはザヴィエルが乗物に乗りまして、またその後には船長が土産物を沢山に盛りあげた姿で、乗り込んで参りました。

この土産物を差出して、謁見ということになったのであります。その威儀の堂々たるところに、大友宗麟は感動してしまいました。直ちにキリスト教の布教を許したのであります。それだけでなく、この様子を見て、即時その場で改宗する者まで出て来ました。この時ザヴィエルが約一時間ぐらいの説教をやっておりますと、

その短い間にどんどんと改宗者が現われて参つたのであります。これはちよつと驚くべきことであります。その後もキリスト教の伝播は非常に早かったのであります。が、とにかく、この最初の時の早さというのは大変なものであります。

そこで、ニツポン人は、威風堂々として、意気の盛んな儀容を示さなければ、信用もしなければ、尊敬もしてくれない。そして、いんもつ音物をやらなければ、贈り物をしなければうまくゆかない。このようなことを悟つたのであります。こういうことは全部、本国へ云い送っているのであります。

また、ニツポン人は非常に文化が進んでおり、知識慾が旺盛であり名譽を重んじ、寛仁大度である、非常に誠実な国民であるけ

れども非常に好奇心が強い、とも云われておりました。何か珍しい物をもって行けば、ニッポン人の好奇心をそそり、魅力となるであろう、黒人でも一緒に連れて行ったらよかろうなどと書いた手紙などもあります。

或る時、ポルトガル人がこのニグロの一人を信長のところへ連れて行きました。信長はこのニグロを見て吃驚りいたしました。信長という人は非常に理智的な人でありまして、ニッポンには珍らしいくらい、現代的な知性を持っていた人物であります。これは嘘だろうというので、裸にしまして、ふんどしまで取らして、手で身体を触ってみましたが、どうしても分らない。今度は、お湯で洗わしてみても色が落ちない。こりやア本物だというので、

一緒に連れて来た僧からこのニグロを譲りうけて、これを自分のお茶坊主みたいにして使っておったそうであります。

これはニツポンの記録にも残っておりまして、また本能寺の変の時には、このお茶坊主が刀を抜いて戦いまして、本能寺が落城いたしますと、今度は信長の子供の信忠の二条城に行つて、明智勢を向うにまわして、戦いました。明智勢は彼の刀をもぎとり、投げ捨てて、お前なんかは殺さないと言いました。そこで捕虜になりまして光秀のところへ連れて行つたのですが、ニツポン人ではないから勘弁してやるということで、教会のほうへ帰してやつたそうであります。その記録は今日も残っております。

どうも、尻りきれとんぼですが、時間が参りましたので、結論

がありませんが、この辺でやめておきます。

——歴史に関する或る講演・終——

青空文庫情報

底本：「坂口安吾全集 07」筑摩書房

1998（平成10）年8月20日初版第1刷発行

底本の親本：「歴史小説 創刊号、第一巻第二号」

1948（昭和23）年10月1日、11月1日発行

初出：「歴史小説 創刊号、第一巻第二号」

1948（昭和23）年10月1日、11月1日発行

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力・tatsuki

校正・・oterudon

2007年7月15日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ヨーロッパ的性格 ニッポンの性格

坂口安吾

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>